

一般社団法人大学英語教育学会(JACET)

第 30 回 (2014 年) 中部支部大会プログラム

大会テーマ

第二言語習得論からみた大学英語教育
—量的アプローチと質的アプローチの共存—

University English Education Viewed in Terms of Second Language Acquisition:
Integrating Quantitative and Qualitative Methods

平成 26 年 6 月 7 日 (土)

開会時間 : 午前 10 時



開催場所 : 椋山女学園大学

〒464-8662 名古屋市千種区星が丘元町 17 番 3 号

一般社団法人 大学英語教育学会(JACET)

第30回(2014年度)中部支部大会

第二言語習得論からみた大学英語教育

—量的アプローチと質的アプローチの共存—

University English Education Viewed in Terms of Second Language Acquisition:

Integrating Quantitative and Qualitative Methods

一般社団法人大学英語教育学会 (JACET) 第30回 (2014年) 中部支部大会

- 日 時 : 2014年6月7日(土) 10:00-17:00
- 会 場 : 相山女学園大学 (星が丘キャンパス 国際コミュニケーション学部棟)
〒464-8662 名古屋市千種区星が丘元町17番3号 電話: (052) 781-1186 (代)
- 受 付 : 9:30~ エレベータ前ホール (G階)
- 大会本部 : 320 学生共同研究室 (3階)
- 発表者控室 : 419 教室 (4階)
- 会員休憩室 : 420 教室 (4階)

●プログラム

- | | | |
|-------------|-----------|--|
| 10:00-10:15 | 開会行事 | 206 講義室 (2階) |
| | 司 会 | 深谷輝彦 (相山女学園大学) |
| | 支部長挨拶 | 大石晴美 (岐阜聖徳学園大学) |
| | 開催校代表挨拶 | 小澤英二 (相山女学園大学 国際コミュニケーション学部長) |
| 10:20-12:00 | 研究発表 (4階) | (第1室[415 講義室], 第2室[416 講義室], 第3室[417 講義室]) |
| 12:00-13:20 | 昼食休憩 | |
| 12:30-13:00 | 中部支部役員会 | 204 会議室 (2階) |
| 13:20-13:40 | 支部総会 | 206 講義室 (2階) |
| 13:40-15:00 | 特別講演 | 同上 |
| 15:20-16:50 | シンポジウム | 同上 |
| 16:50-17:00 | 閉会の辞 | 同上 |
| 17:15- | 懇 親 会 | カフェテリア F.19 (教育学部E棟 1階) |

後援 愛知県教育委員会・名古屋市教育委員会

研究発表 10:20-12:00

第1室 (4階 415 講義室)

10:20-10:50

司会 Tatsuya SUZUKI (Nanzan University)

Research challenges in the investigation of communicative competence (p.4)

Leah GILNER (Bunkyo Gakuin University)

10:55-11:25

司会 Leah GILNER (Bunkyo Gakuin University)

Alternative assessment and responsibility in learning (p.4)

James HIGA (Nanzan Junior College (Part-time lecturer))

11:30-12:00

司会 村田泰美 (名城大学)

音読時におけるプロソディの使用: 語強勢を焦点に (p.4)

吉川りさ (名古屋大学大学院生)

第2室 (4階 416 講義室)

10:20-10:50

司会 倉橋洋子 (東海学園大学)

日本人のための英語ライティングセンター構築への提案—リテラシー支援に焦点を当てて— (p.5)

佐藤雄大 (名古屋外国語大学)

木村友保 (名古屋外国語大学)

11:55-11:25

司会 木村友保 (名古屋外国語大学)

視覚的支援による英語文法教授法についての提案 (p.5)

高橋 薫 (東京理科大学)

11:30-12:00

司会 木村友保 (名古屋外国語大学)

語彙学習の方法と効果: 訳語、類義語、定義による3法の比較を中心に (p.5)

木下 徹 (名古屋大学)

梶浦真由美 (名古屋大学大学院生)

高飛 (名古屋大学大学院生)

第3室 (4階 417 講義室)

10:20-10:50

司会 Bogdan PAVLIY (Toyama University of International Studies)

Appropriate for the language classroom? Considering the use of a 'contentious' Internet video (p.6)

Mark REBUCK (Meijo University)

10:55-11:25

司会 安達理恵 (愛知工科大学)

大学生の「話せるようになりたい」に応える英語授業 (p.6)

永倉由里 (常葉大学短期大学部)

支部総会 13:20-13:40

206 講義室 (2階)

特別講演 13:40-15:00

206 講義室 (2階)

司会 大石晴美 (岐阜聖徳学園大学)

第二言語指導効果研究と英語指導 (p.6)

村野井 仁 (東北学院大学)

休 憩 15:00-15:20

シンポジウム 15:20-16:50

206 講義室 (2階)

第二言語習得論からみた大学英語教育—量的アプローチと質的アプローチの共存— (p.7)

司会 村野井 仁 (東北学院大学)

第二言語ライティング能力の長期的発達：実証主義的アプローチと生態学的アプローチの
接点

佐々木みゆき (名古屋市立大学)

「客観性」を問い直し、量的研究の「客観主義」を乗り越える

柳瀬陽介 (広島大学)

L2 研究における共約可能性を求めて—研究の4条件からの眺め—

竹内 理 (関西大学)

閉会の辞 16:50-17:00

206 講義室 (2階)

副支部長挨拶

大森裕實 (愛知県立大学)

懇親会 17:15-

カフェテリア F.19 (教育学部E棟 1階)

司会 木村 隆 (相山女学園大学)

発表要旨

第1室（4階415講義室）

Research challenges in the investigation of communicative competence

Leah GILNER (Bunkyo Gakuin University)

The communicative competence model is an elaborate construct intended to account for highly complex, dynamic phenomena. The current model is viewed as encompassing six interacting competencies: linguistic, formulaic, discourse, interactional, sociocultural, and strategic. This inherent complexity makes research a daunting task. This presentation will operationalize the communicative competence model with the aim of facilitating analysis and formal appraisal of learner performance. It will identify linguistic and sociolinguistic features of communication that can be used as criteria upon which to measure, track, and describe the performance and development of learners. Of additional interest, this exercise of deconstruction can serve to illustrate how to research other complex phenomena in the field of second language acquisition.

Alternative assessment and responsibility in learning

James HIGA (Nanzan Junior College (Part-time lecturer))

One research hypothesis explored in this presentation is that by using alternative assessments and giving students more responsibility in the classroom, a more motivated classroom environment can be created. For the purpose of this study, two research questions were developed: 1. How accurate are self-evaluation and peer assessment? 2. Does alternative assessment have an effect on students' motivation? In this study, 19 first-year Japanese university students' classmates peer assessments and self-evaluations are compared. The results suggest that peer assessment and self-evaluation do correlate fairly well together; however, the results regarding the effect of alternative assessment and motivation are not as clear. The presenter will describe the study, then discuss the results, and will finally discuss future research.

音読時におけるプロソディの使用：語強勢を焦点に

吉川りさ（名古屋大学大学院生）

本研究の目的は、日本人大学生英語学習者（JLE）がプロソディ（韻律的特徴）の知識を音読時に使用しているか調査し、実態を探ることである。本研究は、プロソディの中でも語強勢に焦点を当てた。そして、JLEと英語母語話者（NS）が4音節語の英単語を音読した際の総音読時間と、各音節の音読時間、声の強さを表すインテンシティを算出し、比較を行った。刺激語は、親密度・頻度・語長を条件間で統制し、第2音節のみに強勢が置かれた1強勢語（traditional）と第1音節と第3音節に強勢が置かれた2強勢語（independent）の21ペア語を使用した。発表では、JLEとNS音読時に見られるプロソディ処理を考察し、類似点と相違点を挙げる。

第2室（4階416講義室）

日本人のための英語ライティングセンター構築への提案—リテラシー支援に焦点を当てて—

佐藤雄大（名古屋外国語大学）

木村友保（名古屋外国語大学）

私たちは過去2年間で大学ライティングセンターの実態調査・分析を行い、多くのライティングセンターでプロダクトの添削指導ではなく、学習者を「書き手として成長させる」ことに力点が置かれていることを明らかにした。この調査をさらに分析すると、書き手は、様々な英文や自ら書いたものを読み込み、「言葉」や「読み手」に対する意識を高め、それらを基礎力としてライティング力を構築していることが分かってきた。本発表では、大学生を英語の書き手として成長させるため、ライティングセンターでライティングを含めたリテラシー全般の支援を行っていく必要性を明らかにし、これからのライティングセンター構築への提案を行いたい。

視覚的支援による英語文法教授法についての提案

高橋 薫（東京理科大学）

高橋（2014）は、高校での学習英文法の再学習を望む大学生を対象とした視覚的支援による英語文法教授法とその成果について明らかにしている。この手法とは、ビジュアル的なアイコンにより基本5文型を表し、それぞれのアイコンの図的な特徴と文法規則を融合しつつ文法理解を積み上げるというアイデアに基づいている。さらに、学生が自らの理解不足を補うことができたのは、この手法により段階的に理解を深めたことによるものであると言及している。本発表では、特に理解に有効であった文法項目についてその手法について紹介する。一例として、現在分詞や過去分詞が副詞句を伴い名詞を後置修飾する、あるいは形容詞が副詞句を伴い同様の後置修飾をするという文法事象に注目する。さらに、この分詞等の項目が理解積み上げ手法の終盤にあることにより、理解のための難易度も高いとみなすと、比較的習熟度の高い学生にとっても理解の曖昧な項目であることが確認できた。これらを踏まえ、文法項目理解のための難易度についても示したいと考える。

高橋 薫（2014）「理解積み上げによる英文法習得法についての提案」 JACET 中部支部 2014年度2月定例研究会

語彙学習の方法と効果：訳語、類義語、定義による3法の比較を中心に

木下 徹（名古屋大学）

梶浦真由美（名古屋大学大学院生）

高飛（名古屋大学大学院生）

本研究では、語彙・学習方法の重要性に鑑み、未知語を、日本語の訳語、英語の類義語、及び、英語の定義という3つの方法で学習した場合の比較を試みた。実験参加者は学部1年生6クラス約180名で、18語の未知語を1語につき15秒ずつ、教室のスクリーンを用いて提示し、同時に、上記の3方法のいずれかで音声による情報を与えた。その後、当該18語に関して、多肢選択法で1語20秒ずつの理解度テストを実施した。結果としては、訳語によるものが、他の2つの方法より、正解の語数が有意に多かった。ただし、方法と熟達度の交互作用、学習方法の主観的評価と客観的評価の異同等、なお多くの検討を要するべき課題がある。

第3室 (4階 417講義室)

Appropriate for the language classroom? Considering the use of a 'contentious' Internet video

Mark REBUCK (Meijo University)

Internet video can be particularly valuable for bringing stimulating content into the classroom. However, the ease with which technology allows video to be incorporated into lessons means teachers may increasingly need to consider the suitability for students of such content. This paper is an investigation into students' views on a hard-hitting British road-safety video about which doubts had been raised by fellow teachers. The students' reactions to the video are analyzed, and the concerns of other practitioners addressed. The discussion touches on some key ELT issues, including the relative weight that should be given to content and linguistic form.

大学生の「話せるようになりたい」に応える英語授業

永倉由里 (常葉大学短期大学部)

漸く本格的な英語教育改革が現実のものになろうとしているが、「英語を話せない自分」に不安を抱いている大学生は少なくない。本発表はこうした大学生の「話せるようになりたい」に応える日本人教師が担当する英語授業「Communication I」の実践報告である。まず、英語学習の目的意識並びに高校での英語授業に関するアンケートの結果に触れる。次に、「Shadowing」、活発なコミュニケーション活動へと促す「icebreaking や brainstorming 的ゲーム」「即時発話」などを多く盛り込み「使用のためのストラテジー」の重要性を強調しながら、段階的にタスク活動へと導く「ストラテジー・トレーニング」としての授業実践について述べる。これらにより「話せるようになる」ための学習プロセスへの認識と動機づけが高まったことを報告する。

<特別講演> 206 講義室 (2階)

第二言語指導効果研究と英語指導

村野井 仁 (東北学院大学)

指導効果研究(effect-of-instruction studies)とは、特に教室内での指導が第二言語習得にどのような影響を与えるのかを調べる研究分野である。インプット仮説、インプット処理、インタラクション仮説、アウトプット仮説、社会文化理論などの第二言語習得モデルに基づきさまざまな指導方法が提案され、その効果が検証されている。そのどれもが、第二言語習得のある特定の側面を説明するには説得力を持つが、どれか一つのみで第二言語能力発達の全体像をとらえることは困難である。日本の英語教育環境において現実の英語学習者の英語運用能力をバランスよく伸ばすためには、これらの理論的モデルが強調しているポイントを体系的に統合した指導がもっとも効果的であると考えられる。本講演では、どのような統合的教室指導が可能なのか、主な教室第二言語習得研究の知見に基づいて一つの指導過程を提案してみたい。題材内容を重視しながら、理解し、考え、調べ、そして伝える CLIL(内容言語統合学習)的要素を持った英語指導の具体例を示す予定である。さらに、このような指導の効果を検証する際の方法、課題についても議論してみたい。

講師紹介

村野井 仁（むらのい ひとし）氏

福島県出身。ジョージタウン大学大学院応用言語学専攻博士課程修了 (Ph. D)。東北学院大学文学部英文学科教授。

主な編著書

Output practice in the L2 classroom, In R. DeKeyser (2007) *Practice in a second language*, Cambridge UP; Focus on form through interaction enhancement. *Language Learning* (2000); 『統合的英語科教育法』(共著、2012、成美堂)、『詳説第二言語習得研究』(共著、2010、研究社)、『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』(2006、大修館書店)。高等学校検定教科書 *Genius English Communication I-III*(大修館書店) 編集代表。

<シンポジウム> 206 講義室 (2階)

第二言語習得論からみた大学英語教育—量的アプローチと質的アプローチの共存—

第二言語ライティング能力の長期的発達：実証主義的アプローチと生態学的アプローチの接点

佐々木みゆき (名古屋市立大学)

本発表の背景は、日本人学習者22名の大学4年間の英語力と日英の作文力がどう変化し、それは何に影響を受けるかについての研究である。その研究では、学習者の変化に影響を与える要因を探るため、大学1年から1年に一回収集した英語標準テスト得点や、それぞれの専門家に採点してもらった日英作文の得点等の量的変化に加え、「その変化をもたらした要因についての学習者自身の見解」をデータとして加えた。本発表では、このような、「当事者の来歴や受け止め方」を重要と考え、学習者の変化に環境などの外部要因の影響が不可欠と考える「生態学的アプローチ」と、研究対象に共有化される傾向をつきとめることを究極の目標とする「実証主義的アプローチ」の接点を求めて模索する本研究者自身の困難な経験を語りたい。

「客観性」を問い直し、量的研究の「客観主義」を乗り越える

柳瀬陽介 (広島大学)

量的 SLA 研究の "mainstream" に対する質的 SLA 研究の "social turn" や "alternative approaches" の申し立てを、近代の認識論と歴史の概観から整理し、量的研究の「客観主義」が無人格的・脱身体的・非歴史的な、西洋近代の認識論の一つに過ぎないことを指摘します。加えて、質的研究は単に「数字を使わない」といった消極的な意味だけで理解されるべきではなく、上述の人格・身体・歴史に加えて、価値・権力・アイデンティティ・複雑性などの論点を含むものであることを示します。また、ユング派の分析心理学の知見をもとに、研究者が「第三者」でなく「第二者」としても研究を進められることを論じます。これらの論考を通じて、「客観性」について問い直します。

L2 研究における共約可能性を求めて—研究の4条件からの眺め—

竹内 理 (関西大学)

本発表では、まず、言語教育と直接的に関係する実践的なテーマを取り扱う「第二言語習得論」と、言語教育とは直接関係しない基礎的な部分を主として取り扱う「第二言語習得論」を区別し、それぞれの還元先の違いを明らかにします。その後、「公共性」、「批判(反証)可能性」、「構造(モデル)性」、「関心相関性」の研究の4条件について言及し、これらの条件が、前述のどちらの区

分の「第二言語習得論」の研究においても、きわめて大切であることを示していきます。その後、L2 動機づけに関わる実際の研究例を提示しながら、文献研究、量的研究、質的研究がどのように連環しあうのか、つまり、研究アプローチのトライアングレーション（「共約可能性」）が、一連の流れの中でどのように起こり得るのかをご覧くださいと思います。この発表を通して、区分やパラダイムの「違い」を前面に出して議論を進めるのではなく、上述した研究の4条件を追求することで「違い」を共存させ、その中で実践や研究を進めていくことが生産的である、と皆さんに感じて頂ければ幸いです。

講師紹介

佐々木みゆき（ささき みゆき）氏

1986年、ジョージタウン大学第二言語としての英語教育学修士課程修了、1987年、広島大学教育学研究科修士課程修了、1991年、カリフォルニア大学ロサンゼルス校応用言語学博士号取得、現在、名古屋市立大学大学院人間文化研究科教授。専門は、第二言語習得論・評価論。Wiley-Blackwell社等の専門書に章を書き、*Journal of Second Language Writing*, *The Modern Language Journal*, *Language Learning*, *TESOL Quarterly*等に論文が掲載されている。又、*Journal of Second Language Writing*と*Language Testing*の編集委員、*Studies in Language Sciences*の副編集長を務める。大修館の『英語教育』にも記事がある。

柳瀬陽介（やなせ ようすけ）氏

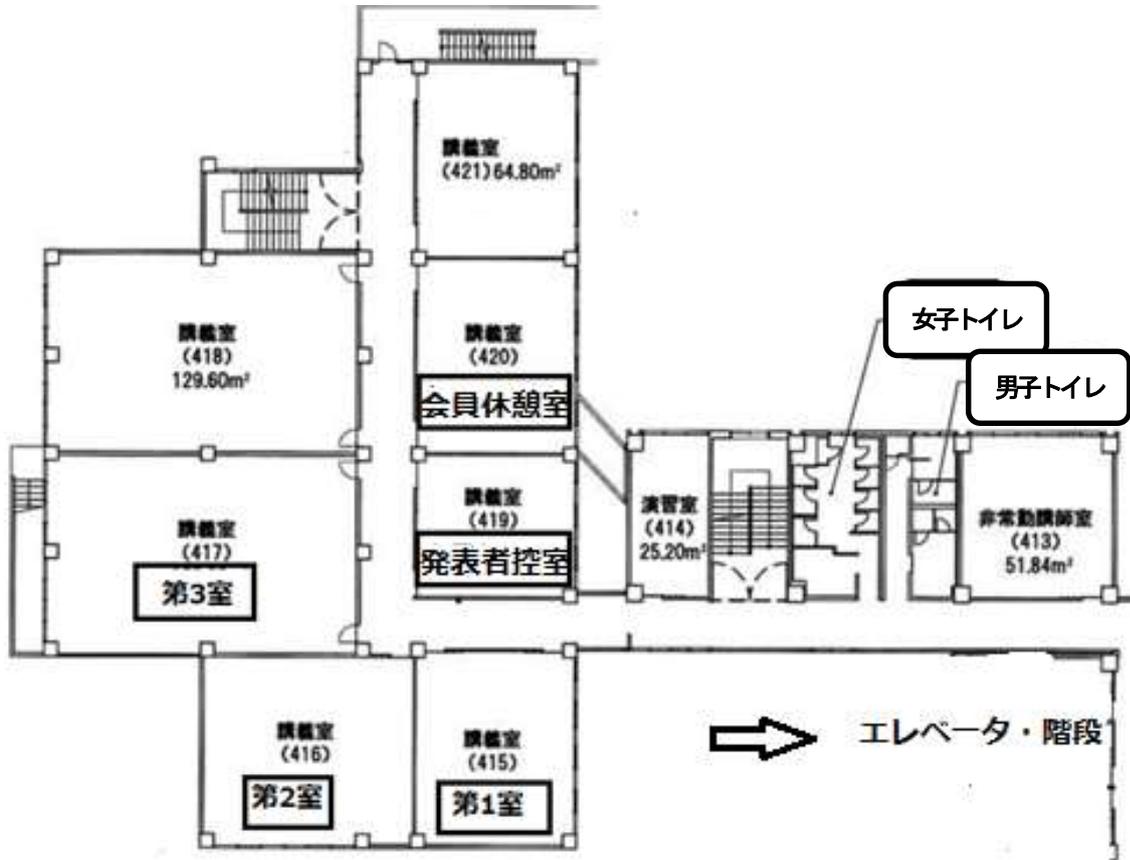
広島大学教育学研究科教授。英語教育現場の豊かな知恵をできるだけ言語化することにより具体的な実践を抽象的に理解し、実践をより多面的に展開できるように努めています。理解のための枠組は、哲学のウィトゲンシュタイン、アレント、ルーマンなどを援用してきましたが、最近では神経科学のダマシオや分析心理学のユングなども使うようにもなりました。ブログ「英語教育学の哲学的探究2」で情報発信をしています。

竹内 理（たけうち おさむ）氏

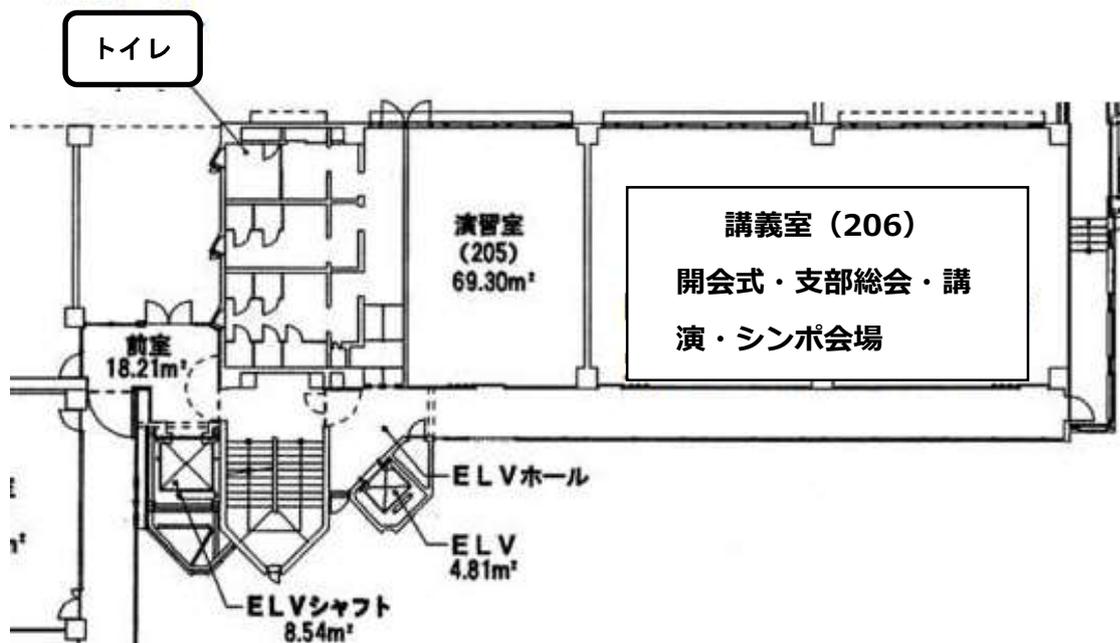
関西大学（外国語学部・大学院外国語教育学研究科）教授。博士（学校教育学）。神戸市外国語大大学院修了後、米国モンロー大学院ヘフルブライト奨学金で留学。同志社女子大学助教授などを経て現職。著書に『外国語教育研究ハンドブック』、『より良い外国語学習法を求めて』（ともに松柏社）などがある。*System* (Elsevier) や *Asian Journal of English Language Teaching* (Chinese Univ. Press) の Editorial Board のほか、*TESOL Quarterly*, *Language Learning* など、多くの国際研究誌の article reviewer を務める。

● 大会会場 国際コミュニケーション学部棟 マップ

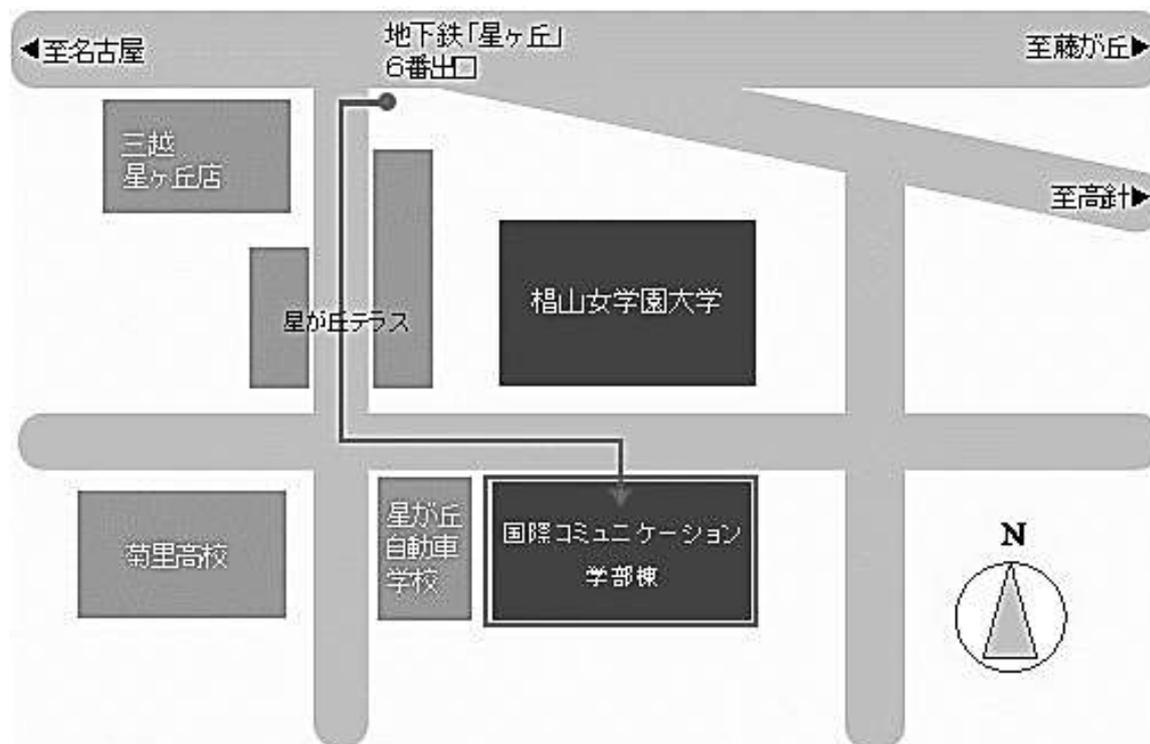
4階 研究発表会場・発表者控え室・会員休憩室



2階 開会閉会行事・支部総会・特別講演・シンポジウム会場



● 大会会場 アクセスマップ



地下鉄東山線「名古屋」駅から約 20 分、「星ヶ丘」駅で下車、6 番出口より徒歩約 8 分

● 昼食および懇親会のご案内

学内の食堂は営業しておりません。近くにはレストランや百貨店などもございますが、各自でご用意ください。飲み物の自動販売機は学内にもございます。また、昼食用スペースもございますので、ご利用ください。

懇親会は事前予約制です（会費 4,500 円）。JACET 中部支部ホームページから、5月28日までにお申し込みください。なお、当日のキャンセルはご遠慮ください。多くの先生方のご参加をお待ちしています。

● 事務局より

- * 出版社の展示はエレベーターホール前（G 階）を予定しています。
- * 発表者で PC をお使いの方は、ご自分の PC をご用意ください。各部屋ともモニターの準備があり PC の接続が可能ですが、マックをお使いの方は RGB 変換ケーブルをお持ちください。
- * 会場は全館禁煙です。
- * レジュメは各自 50 部程度ご用意ください。
- * 当日、中部支部役員会を開催します。役員は指定会場にご参集ください。
- * 会場へは、公共交通機関でお越しください。自家用車でのご来場はご遠慮ください。
- * 大会についてのご質問は、事務局アドレス（下記）までメールでお願いします。

JACET 中部支部紀要編集委員会からのお知らせ

『JACET 中部支部紀要』第 12 号 投稿原稿募集

締め切り：2014 年 9 月 10 日（必着）

詳細は、紀要 11 号およびホームページをご覧ください。

<今年度より締め切り日の変更があります。ご注意ください>

問合わせ先： JACET 中部支部事務局

一般社団法人大学英語教育学会(JACET)中部支部事務局

〒466-8555 名古屋市昭和区御器所町 名古屋工業大学 つくり領域

石川有香研究室内

ishikawa.yuka@nitech.ac.jp